

本文

Q-1. (2). *visito* や *habitantes* などは英語と似ていますが, *cuando* や *siempre* が似ていないのはなぜですか。

A-1. 英語にはノルマン人の征服以来多くのフランス語起源の言葉が使われるようになりました。フランス語とスペイン語はラテン語が共通の祖先なので, とても似ています。そこで *when* や *always* など英語本来の語はスペイン語に似ていませんが, フランス語, そしてさらに遡ってラテン語やギリシャ語に由来する語はスペイン語と共通になります。しかし, 少し意味が変わることもありますから注意しましょう。

Q-2. (6). *Es una ciudad ruidosa y con mucho tráfico* には, どうして *y* が入るのでしょうか? *y* なしで *Es una ciudad ruidosa con mucho tráfico*. でも良い気がしてしまうのですが...

A-2. 確かに, *y* をつけなくても正しい文になります。このときは, *ruidosa* と *con mucho tráfico* が一体になって *una ciudad* を修飾します。大体「騒がしく交通量が多い都市です」という意味になります。一方, 間に *y* を挟むと *ruidosa* と *con mucho tráfico* がそれぞれ独立して同じ資格で *una ciudad* を修飾します。このときは「騒がしく, そして交通量も多い都市です」という意味になります。ほとんど同じ意味ですが, 少し意味の伝え方が違います。

Q-3. (7). *ser* と *estar* の違いがもうひとつよく分かりません。この箇所の *es famosa...* は「有名だ」という状態を表している気がするのですが, これは性質のほうになる, というのが分かりません。

A-3. この文の主語は前の文にある *Madrid* で, 意味は「それ(マドリッド)はいくつかの美術館で有名です」となります。確かに「有名だ」というのは「(有名という)状態」を示しているようですが, 一方 *Madrid* が持っている「性質」を表しているようにも思えます。両者の違いはこの場合微妙ですが, *estar* はそのような状態を保ちながら存続していることを示し, *ser* はその性質を持っていることを示します。ここでマドリッドが有名だというのは, 前者(「有名という状態である」)ではなく, 後者(「有名だ(という性質を持っている)」)にあたります。なぜ, このような違いが生まれたのか, というと, *ser* はラテン語の *ESSE* の意味を引き継ぐ, (基本的な)性質を指示する言葉だからです。*ESSE* がたとえばエッセンス(*essence*)という言葉の語源であることからそのことはいかがえるでしょう。一方, *estar* の語源の *STARE* は「そのような状態で立っている」という意味でした。こちらは, 英語の *stand* や *state* や *stay* と関係のある言葉です。

Q-4. (9). 主語 (*los geniales cuadros de Velázquez...*) が動詞の後ろにきていますが, こうしたことはどんなときに起こるのですか?

A-4. スペイン語はかなり語順が自由な言語で, 「主語 + 動詞」が一般的な語順だとは必ずしも言えません。本文(9)のように主語が長い場合には, 頭でっかちな文にならないために「動詞 + 主語」の語順になる傾向があります。

Q-5. (9). *allí* が辞書に載っていません。何かの活用形なのですか?

A-5. *ll* をひとつの独立した文字と見なす辞書があり, そのような辞書では, *ll* は *l* が全部終わったあとに配列されます。つまり, *alzar* の後に *allá* が続くわけです。

Q-6. (16) los tres juntos の los の意味ってなんですか？定冠詞なのでしょうか？

A-6. los tres juntos の los は定冠詞です。この場合 tres は名詞でこの場合「3人」という意味です。juntos は形容詞ということになります。

Q-7. (18). どうして Espero tomamos ではなく Espero tomar なのですか？

A-7. Espero は他動詞なので直接目的語が必要です。動詞が目的語になるときは、動詞の名詞形である不定詞が使われます。que 節が目的語になるときは第 10 課，第 12 課で習う接続法の活用形になります。

Q-8. (18). Espero tomar café con Pedro y Elvira en Tokio pronto.の文章において，esperar + inf.で「～することを望む，～したい」と教わりましたが，これは esperar する主体と tomar する主体が同じときにしか使えない表現でしょうか。

たとえば esperar する主体が yo で，tomar する主体が nosotros だとどのように書くのでしょうか。つまり「(私は)私たちが早くコーヒーを東京で飲むことを望む」といった意味の文ではどうなのでしょう。

A-8. esperar などの動詞が主動詞の文では，主動詞の主語と従属動詞の主語が同一ならば，従属動詞は不定詞の形をとります。それが Espero tomar café con Pedro y Elvira en Tokio pronto.です。主動詞 esperar と従属動詞 tomar の主語はともに yo となっています。

ご質問にあるように，esperar の主語が yo で，tomar の主語が nosotros となる場合，つまり主動詞の主語と従属動詞の主語が異なる場合は，主動詞のあとに que で導かれる節が続きます。たとえば Espero que tomemos café juntos.となります。ここで現れる tomemos は接続法現在形という形で，教科書¡Dímelo!では最後の方の 10 課で取り扱います。querer という動詞でも同じようなところが起こります。

1. Quiero aprender español. (私はスペイン語を学びたい。)

2. Quiero que aprendas español. (私は君にスペイン語を学んでもらいたい。)

1 では querer と aprender の主語が同一の yo なので，従属動詞の aprender は不定詞，2 では querer の主語は yo ,aprender の主語は tú で異なっているので，節が用いられて，aprendas という接続法の形に活用します。

文法

1. 現在・規則変化

Q-1. 唐突な質問ですが，スペイン語では何故動詞は-ar, -er, -ir 動詞の三つしかないのでしょうか？ラテン語やギリシャ語でもそうなのですか？

A-1. スペイン語の直接の祖先はラテン語ですが，ラテン語では a:re, ere, ere, i:re (:は長い母音を示します) の 4 種がありました。それがスペイン語では長い母音は全部短くなったので，ar, er, ir の 3 種にまとまったのです。スペイン語の歴史を勉強すると，動詞の変化などが次第に単純に整理されてきたことがわかります。現在のスペイン語の体系はとても整然としています。

Q-2. cantáis になぜアクセント記号があるのですか？

A-2. ai の部分が二重母音なので，tais が 1 つの音節になります。最後の音節が n, s で終わっていて，そこに強勢があるのでアクセント記号が必要になります。

Q-3. 自動詞と他動詞はどのように区別しますか？

A-3. 動詞に直接目的語があれば他動詞です。p.10, 文 2 “visito España”など。これに対して, 動詞に直接目的語がなければ自動詞です。p.10, 文 10 “viven muchos amigos”など (muchos amigos は viven の主語です)。動詞に前置詞がついた目的語があるときも自動詞です。p.10, 文 2 “viajo por Europa”など。

Q-4. 動詞の人称変化などなくても, 英語のように言葉は通じると思うのに, なぜこのように 6 通りもの面倒な活用がスペイン語にはあるのでしょうか。

A-4. 英語にもかつては人称による変化が揃っていました。3 単現の s はそのなごりです。英語の兄弟であるドイツ語では今でもしっかりと活用変化があります。スペイン語の動詞が人称により活用するのは主語を省略するため, というより, もともと動詞には人称変化があって, それによって主語がわかっていたのです。それが英語のように人称変化があいまいになり, 主語を明示する必要になったと考えた方がよいと思います。フランス語でも同様に, 語尾だけではわかりにくくなって, それで主語が義務化されています。

2 . ser と estar

Q-5. 英語では, 現在形で三人称単数と名詞や形容詞とを繋げるために, be 動詞の[is]を使っていますが, これはスペイン語の「es」に縁があるのでしょうか? 音として非常に似ていますので, すこし疑問を感じていますが, 例えば: He is handsome. / Él es guapo. など。

A-5. スペイン語の es はラテン語の est に遡ります。これは更にインドヨーロッパ語の推定形*es-に遡ります。英語の is も, やはり, このインドヨーロッパ語の推定形*es-に遡るので, 共通の語源を持つことになります。

3 . 主語人称代名詞

Q-6. スペイン語の文章に主語はかならず表現されていますか？

A-6. いいえ, 動詞の活用形で主語がわかるので書かれないことが多いのです。第 1 課のテキスト (p.10) の文 2, 3, 6, 7 では主語が省略されています。

Q-7. 平叙文の主語はいつも動詞の前にありますか？

A-7. いいえ, そうとは限りません。副詞など他の要素があるときや, 主語が長くなるときは主語は動詞の後ろになります。第一課のテキスト (p.10), 文 9, 10 を見てください。

Q-8. tú と usted はどのように使い分けたらよいのでしょうか？

A-8. tú と vosotros は, 家族や友人など普通の話し方をする相手に使います。usted と ustedes は, 目上の人や初対面の人など丁寧な話し方をする相手に使います。初対面でも若い人之間などでは, tú と vosotros が使われます。ラテンアメリカでは vosotros は使われず, そのかわりに ustedes になります。tú はラテンアメリカでも使われます。

Q-9. usted は何故三人称の形を取るのでしょうか? 全く別の言い方があってもおかしくはない気がするのですが, これは活用形を節約する為なのでしょうか？

A-9. usted は古いスペイン語で vuestra merced 「あなたの恵み」(vuestro は古くは「あなたの」という意味でした) という名詞句に由来します。名詞句なので 3 人称なのです。

Q-10. たとえば三人で話している時に、「君はどう思う，Elvira？」のような発言の時には人称は二人称，三人称，どちらになるのですか？

A-10. ¿Qué te parece, Elvira?とか¿Qué opinión das, Elvira?のように2人称になります。

4 . 名詞の性と数

Q-11. 男性名詞と女性名詞をどう使い分けるのですか？

A-11. 名詞はそれぞれ男性名詞と女性名詞に分類されています。使い分けるといっても、冠詞や形容詞との性数の一致に注意しましょう。「人」や「動物」を示す名詞では、男性（雄）を指すときは男性形、女性（雌）を指すときは女性形を使います。たとえば，español, española（スペイン人）；diputado, diputada（下院議員）；camello, camella（ラクダ）。

Q-12. 男性名詞と女性名詞はどうして生まれたのですか？（区別のない言語も沢山あると思うのですが...）

A-12. 多くのヨーロッパの言語の祖先であると仮定される「インドヨーロッパ語」では、生物についてだけ男性と女性の区別がありました。おそらくこれは、男性と女性、雄と雌の区別を、言葉の使い方の規則に反映することには一定の便益があったためだと考えられます。そのために、形容詞と冠詞には名詞の性の区別と一致するような語形の区別ができました。それが、後に生物以外の名詞にも広がったわけです。

今では生物以外では「男性」と「女性」という意味の差はなく、冠詞・形容詞と名詞の間の文法関係を示すだけになっています。生物には冠詞・形容詞と名詞の間の文法関係を示す性があり、無生物にはそれがない、というのでは統一がなくややこしくなるので、言葉の歴史の上で自然に統一されたのだと思われる。英語も古くは名詞の性がありましたし、その親戚のドイツ語では現代ドイツ語でも性があります（「中性」なんてのもあります）。

Q-13. ジェンダー、男女平等の考えからアメリカでは男女の区別をあまりせず、一般の人として he を使うのではなく、he or she、または they を使ったりする動きがあり、今やこちらの方が主流になってきています。スペイン語では男性形、女性形というように様々な品詞が男女で区別されています。スペイン語にも男女平等の考えによる文法の変化というものはあるのでしょうか？

A-13. 以前は何でも男性形で代表させていましたが、最近では男女の区別をしない、というよりもどちらも述べるようにすることがあります。たとえば、私たちがスペイン語文法の実態調査をするとき、アンケート用紙には調査する相手のことを、

el/la encuestado/a

と記するのが普通です。男女の区別をしなければならないのは文法上仕方がないことですが、言葉を使うときは男性中心にならないように心がけたいと思います。

Q-14. 日本語と英語しか学んでこなかった私には名詞を男性と女性に分けるという感覚があまりわかりません。スペイン語を話す人々が物に性を与えて、世界を見ていると思うと、私たちとは違った世界観を持っていると思うのですがどうでしょうか？

A-14. たしかに生物ならば、性の区別をすることは納得できますが、無生物にもなぜ男性名詞と女性名詞があるのか不思議な感じがします。スペイン語の話者に聞いたことがありますが、たとえば libro のような男性名詞に男性らしさは感じられないし、mesa に女性らしさというものも感じられないそうです。とくに男女の差を意識しながら冠詞や形容詞の性を名詞の性と一

致させているようではないようです。ちょうど主語に合わせて動詞の形が変わるのと同じように、文法的な（自動的な）規則だと考えられます。

Q-15. インターネット *internet* はスペイン語の辞書で女性名詞となっていました。このように最近になって生まれたような言葉は誰が女性、男性名詞の取り決めをしているのですか？

A-15. 辞書によって違うようです。男性名詞だ、としている辞書と、女性名詞だが男性も認める、としている辞書と、まだ決まってない(mf)、としている辞書があるようです。英語をスペイン語で借用語として使うとき、たとえば *whisky* とか *fútbol* とか、どっちとも決めようのないものは一応男性にしておく、という傾向があるようです。ところが *web* だけは女性に決まっているようですね。これは *telaraña*（蜘蛛の巣）という訳語がすぐ頭に浮かぶからだと思います。あるいは *internet* を見て *red*（網）という訳語が頭に浮かぶ人は女性名詞だと直感するのも知れませんが。

こういうことは一般の人が使っているうちに決まります。アカデミーは交通整理をするだけです。

Q-16. スペイン語名詞には性がありますが、スペイン語には存在しない外国語で、語尾が *o* でも *a* でもないもの（例えばたこ焼き "*takoyaki*" など）の性はどのようにして決まるのですか？

A-16. *takoyaki* を含めて、外国語から新しい名詞が導入される時は、ほとんどが男性名詞です。たとえば、*córnier* 「(サッカーの)コーナーキック」、*kimono* 「(日本の)着物」など。「たこやき」も *el takoyaki* が使われるようです。また、意味的な連想で女性になることもあります。*la hinomaru*, *la kokeshi* など日本の観光ガイドブックなどで見られますが、これらは、それぞれ *bandera* 「旗」、*muñeca* 「人形」が女性名詞だからです。もちろん *ama* 「海女」、*geisha* 「芸者」などの女性を示す名詞も女性名詞として扱われます。

練習

Q-1. 練習 1 例題 . なぜ *¿dónde?* にアクセント記号がついているのですか？

A-1. 確かに、母音で終わっていて、後ろから 2 番目の音節に強勢があるので、規則通りならば必要がないはずですが、疑問詞にはアクセント記号をつけるというルールがあります。*¿Cómo está usted?* の *¿cómo?* も同様です。関係副詞 *donde* や接続詞 *como* と区別するためです。

Q-2. 練習 3 例題 . なぜ *sí* にアクセント記号がついているのですか？

A-2. 原則では単音節語にはアクセント記号をつけません。しかし、他に同じ形の単語があるときは、このようにアクセント記号をつけます。*sí* のアクセントは、「もし...ならば」(英語 *if*) という意味のアクセント記号をつけない接続詞 *si* と区別するためのものです。

Q-3. 練習 3 (2) . *¿Hablaís inglés?* とありますが、*hablar en español* と *hablar español* の違いは？

A-3. たしかに *hablar* という動詞には (1) *hablar en español* という使い方と (2) *hablar español* という使い方があります。(1) *hablar en español* は日本語にすると「スペイン語で話す」という意味に対応し、とくに内容を問題にしないで、とにかく何かのことについてスペイン語を使って話すことを意味します。一方、(2) *hablar español* は日本語にすると「スペイン

語を話す」という意味に対応し、「スペイン語」が直接の目的語になります。(1) ではとくに話す内容を問題にしていますが、(2) では話すことがスペイン語という言語であることをはっきりと意識しています。どちらも同じような内容を行っているために違いがわかりにくいかもしれません。(1)と(2)の違いは(1) に前置詞の en があることです。これによって(1)の表現が間接的になり、「スペイン語」español が背後に退きます。一方(2)は前置詞がなく、「スペイン語」español がそのまま直接目的語となりダイレクトに前面に出てきます。このように言語の形式は意味と密接に関わり合っていますから、形や構造を意識してみてください。

Q-4. 練習 3 (3) ¿Fernando y David son médicos? 英語と違って疑問文でも語順を変えたり、原形にしたり、ということはないのですか？(否定文も)

A-4. 疑問文では、主語が書かれてあれば、動詞+主語となります。

¿Está usted cansado? (あなたは疲れていますか)

しかし、¿Usted está cansado? (あなたは疲れていますか)ということもできます。この場合はUsted が話題として強調されています。

さらに疑問詞があればその前につけます。

¿Dónde está Valencia?

この場合は主語を前におくと変です。×¿Dónde Valencia está?

スペイン語には、英語のように疑問文や否定文で動詞が「原形」になるということはありません。Does he have a computer? – No, he doesn't. のような使い方をする“do”がスペイン語にはないからです。そもそも「原形」という概念がなく、辞書には動詞は不定詞の形で載っています。

その他

Q-1. 授業の教材で安土城を「Castillo Azuchi」と書いていたのですが、城(じょう)は別に固有名詞じゃないのに、なぜ大文字なんですか？小文字ではだめなんではしょうか？よろしくお願いします。

A-1. なるほど「城」自体は普通名詞であり、固有名詞ではありませんが、それに「安土」という地名がかかって「安土城」となると、これは全体として立派な固有名詞なのです。ためしに、まず「山」を思い浮かべてください。あなたの頭には、今まで目にしたり登ったりしたさまざまな山の姿が浮かぶはずですが、これは「山」が普通名詞だからに他なりません。続いて、その「山」に「富士」という言葉を前置してください。あなたの頭の中のいろいろな山は瞬時に消えうせ、あの日本一の名山の姿だけが像を結びませんか？同種のものの中から一つだけを具体的に名指せる名詞、これは固有名詞です。

Q-2. 英語なら、安土城は Azuchi castle となると思うのですが、スペイン語では Castillo Azuchi となり、また淀川も辞書によると Yodo river が río Yodo になっていたのですが、この違いには歴史的背景などがあるのでしょうか。

また前回の質問で Castillo Azuchi の Castillo が大文字になるのは納得したのですが、río はなんで小文字になっているのでしょうか。

A-2. スペイン語では、地名を形容詞のようにして「前から」名詞にかける言い方を普通しません。Shibuya Estación とは言わず、Estación de Shibuya と言います。そして、ここの de はしばしば落ちることがあります。同様にしてできたのが、Castillo Azuchi であり、río Yodo

という言い方です。

2つめの質問については、Castillo Azuchi の場合、前述のように de が落ちたことにより、Azuchi という地名が形容詞のように働いて Castillo という名詞にかかり、全体としてひとつの「安土城」という固有名詞を形成しています。río Yodo も全く同じように考えてよいのですが、書き手が小文字を使ったのは、río と Yodo をそれほど一体のものに見なしておらず、「淀」という「川」という具合に独立した2語の結びつきと捉える意識がまだ残っているからだと思います。普通名詞の「川」が意識されているため、小文字が使われているのでしょう。

Q-3. スペイン語との関連性は微妙な質問ですが、エスペラント語にも不規則活用は存在しますか？

A-3. 自然の言語につきものの不規則性を排してデザインされた人工言語がエスペラント語です。不規則動詞は存在しません。しかし不思議なもので、エスペラントはその合理性や世界平和の精神にもかかわらずいっこうに広まりませんでした。こんにち世界の共通言語のデファクトスタンダードのようになってしまった英語は不規則性だらけの言語です。ある言語が広まるかどうかには、その合理性、規則性とはべつのさまざまな要因が働くようです。いずれにせよ、エスペラントはヨーロッパ語にもとづいていますから、非ヨーロッパ人にとってはたいして学びやすいともいえません。ちなみに、いろいろな言語を学んでいると、不規則な変化は身体になじみやすい、覚えやすいような音感になっていることが多いと気づきます。このへんに、論理的な整合性だけでは割り切れない、言語と身体、言語と記憶の関係がありそうです。